

「患者と家族のがん研究基金」実績報告会

Cancer Research Funds for Patients and Family

プログラム抄録集

日 時 平成 21 年 5 月 21 日
午後 6 時 30 分 (総会終了後)
場 所 ペリエホール 5F 「楓」

主催 NPO 法人 医療・福祉ネットワーク千葉

◇ 開会の辞 崎山 樹 (理事長)

司会進行 木村 秀樹 (理事)

◇ 成果発表

1 部 座長 岡住 慎一 (東邦大学医療センター佐倉病院外科 教授)

1 がん患者の生き方支援

支えあう会「α」 事務局長 五十嵐 昭子

2 癌特異抗原ペプチドワクチン療法の標準化を目指した臨床試験

国立がんセンター東病院 がん治療開発部 機能再生室 中面 哲也

3 Real-time PCR 法を用いた大腸癌における Toll-like receptors (TLRs) 発現の検討

東邦大学医療センター佐倉病院外科 二本柳 康博

4 H20 年度患者と家族の研究基金活動報告

順天堂大学部付属浦安病院 外科 杉山 和義

2 部 座長 高野 英行 (千葉県がんセンター 画像診断部 部長)

5 悪性神経膠腫罹患患者の生命予後 QOL 維持の両立を目指したテーラード治療の構築

千葉県がんセンター 脳神経外科 井内 俊彦

6 子宮頸部細胞診における「異型扁平上皮細胞 (ASC)」の特徴と HPV 感染との関連について

千葉県がんセンター 婦人科 田中 尚武

7 卵巣癌に対する千葉大学婦人科の治療戦略

千葉大学医学部 婦人科 加藤 一喜

8 ヒトがん細胞におけるミトコンドリア DNA 変異の検出と同変異の転移能に及ぼす影響の検討

千葉県がんセンター研究局 越川 信子

◇ 閉会の辞 木村 正人 (事務局長)

1. がん患者の生き方支援

支えあう会「 α 」 事務局長 五十嵐 昭子

我々は千葉県を中心に活動するがん患者会である。今回助成をうけて、県外でがん医療に貢献している「 α 」にゆかりのある医療従事者を訪ね、その活動を「 α 」通信で会員に報告することにした。今回訪問したのは神戸在住の会員・山本篤医師である。山本氏が院長を務めていたホスピス希望の家、および希望の家での同僚松本看護師が立ち上げた看取りの家・なごみの家を視察し、山本氏に新しい山本医院での豊富などをお聞きした。

2. 癌特異抗原ペプチドワクチン療法の標準化を目指した臨床試験

国立がんセンター東病院 臨床開発センター がん治療開発部 機能再生室 中面 哲也

進行肝細胞がん患者を対象としたグリピカン3ペプチドワクチンの臨床第I相試験を実施した。安全性と免疫学的有効性だけでなく、臨床的効果も見出すことができたと考えている。今後は手術やラジオ波焼灼療法などの根治的治療後の再発予防効果を検証する臨床第II相試験も実施する。

3. Real-time PCR法を用いた大腸癌におけるToll-like receptors (TLRs)発現の検討

東邦大学医療センター佐倉病院外科 二本柳 康博

自然免疫系においてTLRsは病原体を認識し免疫系の賦活化に重要な役割を果たしている。今回我々は発癌に自然免疫系の応答異常が関与しているのではないかと仮説を立て、大腸癌手術検体40例の癌部および非癌部組織を用い、Real-time PCR法でTLR2,4発現の有無を確認し定量化を行い、2群間での発現の比較検討を行ったので報告する。

4. H20年度患者と家族の研究基金活動報告

順天堂大学浦安病院・外科准教授 杉山和義

H20年度患者と家族の研究基金における活動は、新しい乳がんマーカー(p53抗体)を臨床的に研究しその陽性率は15.5%である結果を得た。また、増加を続ける乳がんに対して、広く情報を伝えるために第1・2回葛飾南部乳腺疾患研究会、第20回千葉乳腺診断フォーラム、第15回お茶の水乳腺疾患研究会、第3回JBCM研究会を主催した。

5. 悪性神経膠腫罹患患者の生命予後と QOL 維持の両立を目指した、テーラーメイド治療の構築

千葉県がんセンター 脳神経外科 井内 俊彦

神経膠芽腫に対する高線量照射は、優れた腫瘍制御と同時に強い放射線障害の危険を持つ。真に高線量照射を必要とする症例の選別を 目的に、MGMT メチル化による治療感受性の違いを、106 例の神経膠芽腫で検証した。MGMT メチル化の有無に関わらず高線量 照射は従来の照射に比較して有効だったが、MGMT メチル化を認めテモゾロミドを使用した症例では高線量照射の有意な有効性を認めず、この群の症例に対しては照射線量の減量による QOL 維持を追求しようと思われた。

6. 子宮頸部細胞診における「異型扁平上皮細胞(ASC)」の特徴と HPV 感染との関連について

千葉県がんセンター 婦人科 田中 尚武

本研究では、子宮頸部異型扁平上皮細胞出現症例における、高リスク型 HPV の検出頻度を算出し、細胞所見と HPV 感染との関連性について検討することを目的とした。本研究期間において子宮頸部細胞診において ASC と判定したのは 57 例であった。ASC-US 判定については、核腫大があり、粗顆粒状クロマチンがないものを ASC-US と診断した。そのうち HPV 検査に同意が得られたのは 30 例(ASC-US 21 例、ASC-H 9 例)であった。ASC-US の高リスク HPV 陽性率は 38.1%、ASC-H は 44.4%であった。本研究成果をもとに、今後の ASC 症例のトリアージについて言及したい。

7. 卵巣癌に対する千葉大学婦人科の治療戦略

千葉大学医学部 婦人科 加藤 一喜

近年増加傾向にある卵巣癌患者さんの半数以上は、卵巣・子宮という婦人科臓器を超えて腹腔内全体に癌が転移をした進行期の状態で発見されます。

卵巣癌の治療の根幹をなすものは、病巣の完全摘出を目指した手術療法と、それに引き続く化学療法であります。この化学療法のメニューは既に確立しており、全国どの病院でも同じ薬剤での治療を受けることが可能です。よって、手術により腹腔内全体に拡がった癌病巣を全て切除し、肉眼的に残存腫瘍なしの状態に成し得たか否かが、最も重要な予後因子であることが分かっています。千葉大学婦人科では、進行卵巣癌に対して残存腫瘍のない完全切除を確実に、そして安全に遂行することを目指し、①婦人科腫瘍外科専門医が手術チームを立ち上げ、②完全切除のためのあらたな術式を開発して、③安全に手術は遂行され、実際に予後の改善が得られるかどうかの検証を行っています。

千葉大学婦人科の卵巣癌治療成績は良好であり、世界に誇れるものであると自負しています

が、このデータを本研究報告会において発表したいと考えています。

8. ヒトがん細胞におけるミトコンドリア DNA 変異の検出と同変異の転移能に及ぼす影響の検討

千葉県がんセンター研究局 ・ 越川 信子

我々は、マウスがん細胞で、ミトコンドリア DNA (mtDNA) 中の呼吸鎖複合体 I の酵素をコードする遺伝子の病理性ミスセンス変異が、転移能を亢進させることを報告した。そこで、肺癌患者と大腸癌患者の原発巣及び転移巣での mtDNA 遺伝子の変異を調べた。その結果、mtDNA ミスセンス変異の頻度が、複合体 I の酵素である ND1 と ND6 をコードする遺伝子では、転移巣で原発巣の 2~4 倍高い傾向を示したが、複合体 I 以外の遺伝子では頻度に差はなく、複合体 I の酵素の遺伝子変異が転移と関連する可能性が、臨床検体の検討からも示唆された。